佐潟 ―人と佐潟の関係性の再構築―

法政大学大学院　景観研究室
安達幸輝、外山実咲、橋本航征

佐潟のむかし

生活と密接だった時代

郷土誌『越後赤塚』によると、人の生業と潟によって成り立っていた事がわかった。
潟を身近に感じながら暮らしていた人びとが映り込む風景が佐潟にはあった。

①春風のなかの田園風景

②佐潟で遊ぶ夏休み

③寒さと戦う蓮根収穫の秋

④冬もにぎわう砂丘農地

佐潟湖面

佐潟の水は湧き水を主として、雪とけ水。3月の湖面は鏡のごとく銀色にきらきらに輝いて周囲の砂丘と遠くの角田山まで映し出していた。
（田口正「赤塚の唄で佐潟を思う」越後赤塚 26 号より）

農作物
タバコ、赤塚大根、スイカ、球根

魚類
フナ・コイ・ウナギ・ナマズ
植物
じゅんさい・ハス・ヒシ
鳥類
カモ、ヒシクイ、白鳥

湖面での蓮根収穫（③）

蓮根を収穫する者は作業が終わると川端の小屋で焚き火をし、体を真っ赤にして、背中や腹あぶりで体を温めている。その姿は佐潟の風物であった。
（田沢六郎「赤塚の風土に育った喜び」越後赤塚 15 号より）

砂丘地農業（④）

松の緑に小鳥の声、御手洗潟と佐潟・村並みの向こうに蒲原平野と越後連山、後方には日本海や更に遠くは佐渡ヶ島が見渡せ、あるいは松風や時には日本海の波音を聞きながら農民は仕事に勤しんだ。
（並松景政「赤塚地区の谷称地名」越後赤塚 14 号より）

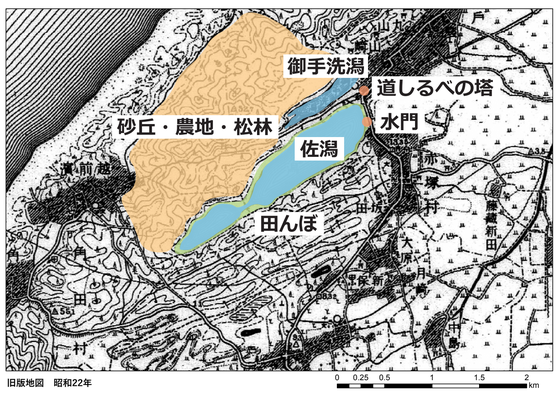
四季折々の農作物・木や草の色合いを楽しんできた。
（並松景政「よろず郷土研究」越後赤塚 10 号より）

畑作物の種類が多かった当時、畑作業は老若男女、子供たちも加わってにぎやかであった。
（並松景政「赤塚地区の谷称地名」越後赤塚 14 号より）

田んぼでの稲作（①）

新しいすげ笠に絣の着物に赤い帯、赤い腰巻を覗かせ、春風の中の田園風景。多忙の中でも春風駘蕩の感じである。
（石津貞夫「農家の様子と母ティ」越後赤塚 12 号より）

小学校高学年の子供も大人と一緒に田植えをした。乳飲み子をおぶって幼女の手を引いた子守達の行列で賑わった。
（真田浩「昭和 12 年代の農家と子供達の稼働」越後赤塚 16 号より）



道しるべの塔

子供たちがはだしで鬼ごっこをしたり、潟の波で魚がパタパタ打ち寄せてくるので、ハンゴ（飯盒）をもってきて塔の石の上でつぶして食べていた。
（鎌野シズ「佐潟周辺思い出す事」越後赤塚創刊号より）

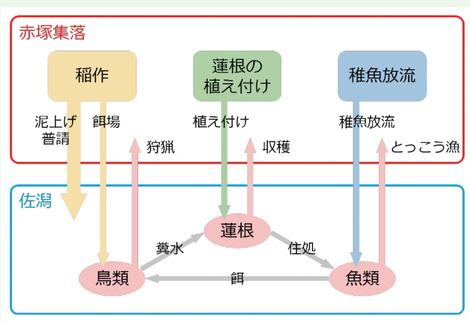
水門（②）

4 月、苗代水のかかるころ、水門に網をもってイサザを取る地域の人の並ぶ姿は当時の風物詩であった。食卓に上がったのだろう。
（笹口正「赤塚の唄で佐潟を思う」越後赤塚 26 号より）

鮒などがの産卵期になると、藪の中でつかみ取りをするのが楽しかった。晩秋の頃に天候が荒れると佐潟のうなぎが潟の水門から下る。そのうなぎやフナを水揚げするのも楽しかった。
（田沢六郎「赤塚の風土に育った喜び」越後赤塚 15 号より）

夏には水門の下は天然のプールに変わり、子供らの水遊び場。水泳を教える場所でもあった。
（笹口正「赤塚の唄で佐潟を思う」越後赤塚 26 号より）

郷土誌『越後赤塚』から抽出した佐潟での思い出



人と佐潟の関わり（大正・昭和初期）

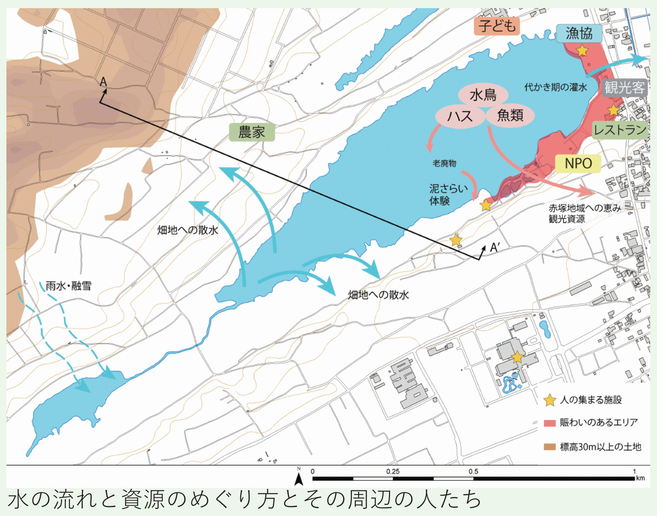
佐潟の歴史

明治		佐潟が官有地になる。 漁業組合、蓮根組合を創立。 蓮根栽培・魚類養殖・水鳥群集を図り、赤塚地域の産業とする。 現金売上は赤塚村の貴重な財源となる。 ウナギ・コイ・フナの稚魚、スッポン稚亀を毎年放流。
大正		佐潟のウナギが新潟市の高級料亭で使われる。 他に、コイ・フナ・蓮根も新潟県内の名産として知られた。
昭和	25年	国内初の国定公園である「佐渡弥彦国定公園」に指定される。 （後に「佐渡弥彦米山国定公園」に改称）
		昭和40年代前半まで佐潟周辺で狩猟が、佐潟内では蓮根堀りが行われていた。 高度経済成長期から、潟の恩恵を必ずしも必要としない生活様式が広がり始める。
	46年	国指定鳥獣保護区に指定される（「国指定佐潟鳥獣保護区」）。
	58年	新潟市の公園として、佐潟の整備が始まる。
平成	8年	国内10番目となる「ラムサール条約」に登録される。
	10年	佐潟水鳥・湿地センターが開設される。

佐潟のいま

多目的に集まる人たち

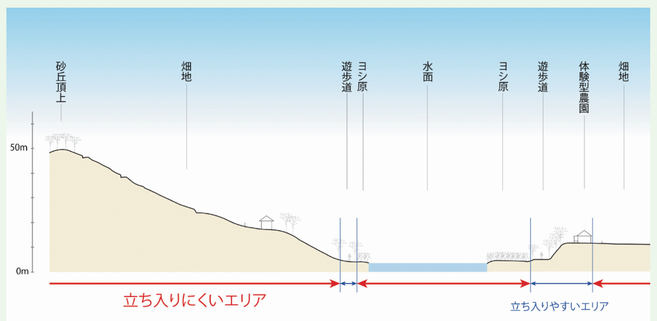
ラムサール条約登録湿地である佐潟にはあらゆる立場の人たちが訪れる。
観光客をはじめとする多くの人は、主に整備されたエリアや人が集まる施設に行く。一方、地元の人は農地や集落にいるので、その人たちが交わることが少ない。
地元の市民団体の活動目的と構成する人の年齢層は幅広い。
そこで、その人たちどうしが相互に関わる機会が増えるとおもしろくなるのではないか。



水の流れと資源のめぐり方とその周辺の人たち

佐潟のポテンシャル

佐潟周辺は起伏が豊かな砂丘地形だが、そこの大部分が農地であるため、一般人が気軽に立ち入りにくくなっている。
そのような立ち入りにくい場所なので、砂丘頂上のような、眺めのよいところはあまり知られていない。
実はおもしろい景色があるのではないか。



A―A' 間断面図

佐潟と関わる団体

新潟市潟環境研究所提供資料をもとに作成

団体名	活動内容	活動時期
佐潟と歩む赤塚の会	潟舟乗船体験、潟普請、佐潟を喰らう会などのイベントの開催。佐潟をめぐる地域の連携役。	通年
佐潟ボランティア解説員の会	佐潟ボランティア解説員による自然解説活動。	第２・４土曜日、その他随時
佐潟村	地元の野菜の販売。	土日の午前
中原邸保存会	中原邸の保存、継承。4月、10月中原邸一般公開。佐潟、中原邸の竹で炭焼き。	
赤塚郷土研究会	赤塚地域を中心に歴史の調査研究。会誌「越後赤塚」を年1回発行。	通年
佐潟野鳥倶楽部	佐潟を歩いて野鳥を観察。	毎週火曜日
赤塚佐潟歴史ガイド	赤塚地域および佐潟周辺の史跡や自然を中心としたガイド活動を実施。	
新潟大学Ｅホーム	新潟大学の制度「ダブルホーム」で年間を通じて地域貢献活動を行う。	
赤塚佐潟地図研究会	赤塚地区および佐潟周辺の自然・歴史等を楽しめるコースの設定と地図の作成。	
佐潟観光協会	佐潟まつりの開催。	８月
コミュニティ佐潟	小学校区ごとに存在する、市と協働して地域のまちづくりなどに取り組む組織。	
佐潟クリーンアップ実行委員会	底の泥をあげ、水路の草を刈る「潟普請」の開催。	９月
佐潟周辺環境保全連絡協議会	『佐潟周辺自然環境保全計画』の進行管理、佐潟での取り組みの報告・検討。	
赤塚漁業協同組合	佐潟での漁（11月・３月）、鯉祭り（３月）を開催。	

佐潟のこれから こころの風景へ

風景の舞台をつくる

(1) 新しい交流の場
佐潟のポテンシャルである砂丘地形の高低差を活かす。佐潟に来る人たちの今までにない交流を生みだして、そこでの活動も生み出す。

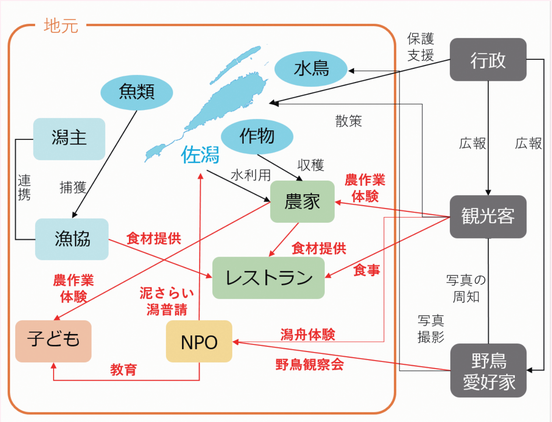
(2) 交流の場をつなげる
既存の人が集まる施設も含め、佐潟周辺のネットワークを築く。今まで行かなかったところにいけるようになり、気づかなかった風景を見えるようにする。

砂丘頂上から見る農地と佐潟

人の活動を複雑にする

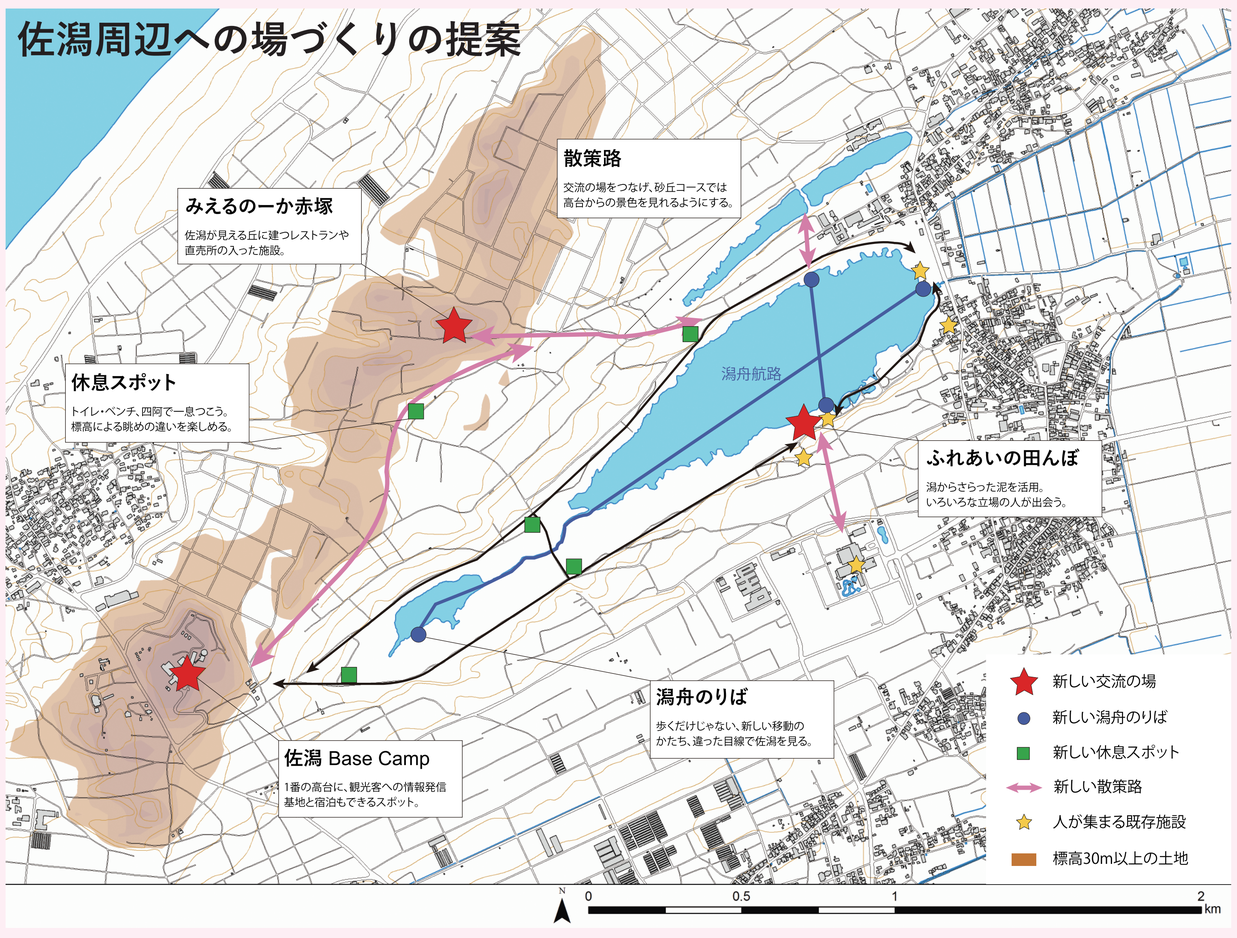
(1) 新しい関係を生みだす
農作業体験や潟舟体験といった新たなイベントを開催することで、佐潟に集まる人たちに、今までにない関係を持たせる。

(2) 従来の関係も増強される
新たな関係が生まれると、佐潟を訪れる機会が増える。すると、人たちの交流も増えて、今まであった関係もより強くなる。



人の関わり方の提案（黒：従来、赤：新規）

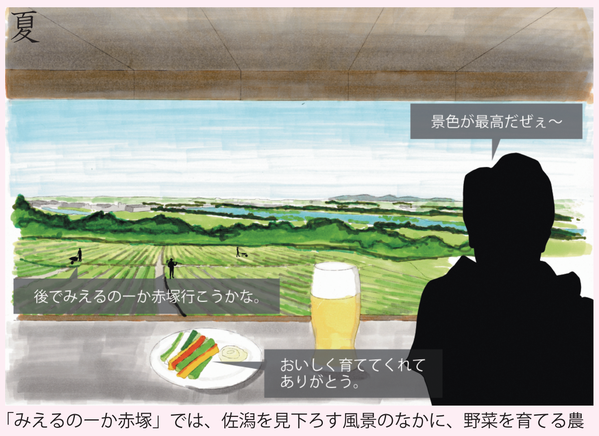
「ふれあいの田んぼ」で、田植えの体験者と指導者が出会う。その近くでは水鳥を観察している野鳥愛好家や、ぶらっと散歩をしている人が映り込む。



既存の「湿地・水鳥センター」でも、観察する野鳥愛好家に加えて、演奏する中学生、それを聴く友達やつられて入った通りすがりの人が映り込む。

散策路だって重要な交流の場である。ここでは、花を植えるボランティアの人と通りすがりの観光客が映り込む。

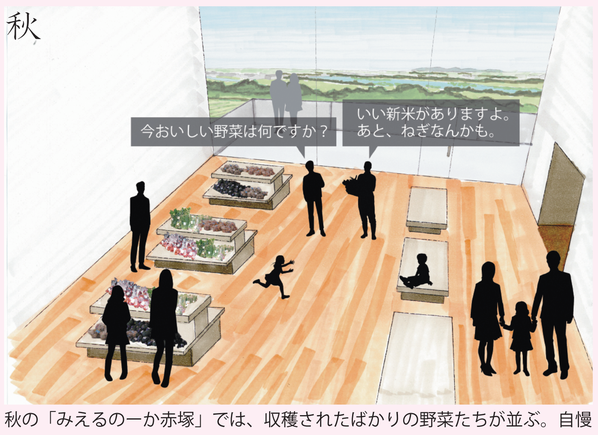
「佐潟 Base Camp」では、佐潟を訪れた者どうしで情報交換したり、次の日の予定について語ったりする様子が映り込む。



「みえるのーか赤塚」では、佐潟を見下ろす風景のなかに、野菜を育てる農家や楽しむレストランのお客さんが映り込む。

潟舟体験では、歌いながら船を漕ぐ船頭さんと一緒に歌う子どもたち、さらに水面には蓮根を採る人が映り込む。

砂丘に続く散策路途中の休息スポットでは、かたあるきのガイドさんと説明を聞く参加者、周りの畑で収穫をする農家が映り込む。



秋の「みえるのーか赤塚」では、収穫されたばかりの野菜たちが並ぶ。自慢の野菜を売る生産者と会話を楽しみながら買い物する消費者が映り込む。

あらゆる季節や場所において、佐潟に来る人たちが風景のなかに映り込む。　→　こころの風景の創出へ